石碑『大法師不慶』

ーディオゴ結城と荒川門内ー

序

「ポオロ様、おいでたのですね。おなつかしく。やっと、お会いできました。」

「レウコ、よくがんばりました。さあ、ともにパライソへ。」

レウコ（良悟）はディオゴ結城了雪、『不慶』とも呼ばれた吉利支丹伴天連であった。二〇〇八年十一月二十四日、教皇ベネディクト十六世は日本の殉教者を列福した。この中にイエズス会のレウコ結城がいる。一五七四年天正二年、レウコ結城は、京の足利将軍義晴の子周暠の孫として生まれた。幼名は喜八郎、元服して朝能と名乗った。一五八六年天正十四年、十二才で高槻のセミナリオに入り、レウコ（ディオゴ）の洗礼名を授かった。ポオロは阿波出身の吉利支丹、聖人パウロ（ポオロ）三木。レウコとポオロは同じ阿波国所縁の人だったと伝わる。レウコにとって、ポオロはともにデウスに仕える吉利支丹であり、先達だった。レウコは、一六三六年寛永十二年、大坂で穴吊りの刑を受け、一生を終えた。その生き様は、誠実、勤勉で心は清く、同じ時代を生きた人々の人生をも大きく変えた。阿波足利家に仕える荒川門内正次もその中の一人であった。阿波市市場町日開谷には、荒川門内もしくはその子孫が建てたと思われる『大法師不慶』と刻まれた一基の石碑が今も残されている。

一　不慶転生

「ほう、ポオロ、と申すのか。」

馬上の織田信長は、道端に端座している小柄な若者を見下ろしていました。若者は、裾野の広がった黒い修道服を身にまとい、眩しき銀色の光を放つロザリオを首にかけていました。

商いで賑わう安土城下の一角に吉利支丹の教会堂が建てられ、その聖堂の高い窓からは明るい春の光が降り注ぎ、鐘の音が鳴り響いていました。セミナリオにはオルガンの調べにのって、若き吉利支丹の美しい歌と祈りの声が満ち溢れていました。信長は家臣とともに新しく建てられた教会の様子を見るためにセミナリオを訪れていたのでした。

ポオロ三木と呼ばれたその修道士は、ゆっくりと顔を上げ、張りのある声で答えました。その顔には、誇らしそうな笑みが浮かんでいました。ポオロ三木は、阿波の武将三好長慶に仕えた武士、三木半太夫の子として生まれ、十二才で安土のセミナリオに入り、神学を学んでいました。

「はい、洗礼を受け、ポオロというお名前をいただきました。今はセミナリオで司祭のオルガンティノ様から神学を学んでいます。」

「そうか、いよいよ真の吉利支丹となったということか。」

教会を眺めている信長の横顔に、うっすらと笑みが浮かびました。

「はい。わたしは、デウス様とマリア様のお言葉を皆様方に広め、新しき神の國を切り開いてまいりたいと存じます。」

ポオロは、胸の前ですっと十字を切ると両手を組み合わせ、その上にゆっくりと額を載せ、静かに目を閉じました。その様子を横目で見下ろしていた信長は、鼻でふんと笑い、億劫そうに顔を向けました。

「ふうむ、それでは、まずこの安土城下でデウスの教えを広め、新しき時が来たことを町衆にしっかりと知らすが良い。」

と甲高い声で言い放つと、笑いながら馬を進めて去って行きました。
「右府様、ありがとうございます。この國の全ての人にデウス様の光を届けます。」
残されたポオロは、地面に額を付けるように平伏し、姿を消した信長に向かって心からの感謝を述べました。

一五九六年慶長元年、信長が本能寺で斃れた後、天下を手に入れた豊臣秀吉は、吉利支丹が勝手に布教活動を進め、寺社を破却して教会を建てていることに怒りを覚えました。秀吉が伴天連追放令を発すると、ポオロ三木ら吉利支丹は、秀吉配下の奉行石田三成の手によって京都で捕らえられ、暗く寒い牢に閉じ込められてしまいました。
「三木殿、どうしても教えを捨てることはできぬのか。」
三成は片膝をついて狭い牢内を覗き込み、困り果てたように首の後ろに手を当てました。その視線の先には、浅葱色の単衣一枚の上に後ろ手で荒縄をかけられたポオロが横倒しになっていました。ポオロは、三成を鋭い目で見上げて言いました。
「治部様、私は、万事を越えてデウス様を大切に思っています。」
三成は、その視線を避けるように立ち上がると、背中を向けたままで言いました。
「太閤様は土佐の浦戸に着いたサンフェリペ号の一件で、たいそうお怒りである。お主の他の吉利支丹らも同じことを言っておるが、このままでは太閤殿下はそなたらのことを決して赦されませぬぞ。」
三成は、背中越しにポオロの様子を探りました。
「治部様、デウス様の教えは、身分も男女も貧富や位も問わずに、天下の民を全て幸せにするものです。戦いや争いが続いて傷ついた民の心を救うものなのです。わたしたちは、傷つき見捨てられた者や病の者に薬を与え、飢えた者に食事を施し、生きるための希望の光を与えてきたのです。重き病で恐れられ遠ざけられた方々にも、デウス様は平等に恵みをお与えくださるのです。」
ポオロは、毅然と言い放ちました。そして、目を閉じて誓いの言葉を唱え始めました。

一、でうす様を大切に思ふこと
一、我が身を思ふごとく、ぽろしも（隣人）を大切に思ふこと
一、病者を癒すこと
一、飢えたる人に食事を与ふこと
一、行脚の者に宿を与ふこと
一、恥辱を堪忍いたすこと
一、生死の人と我らに仇なす者のためにデウス様を頼み奉ること

その声をしばらく聞いていた三成は、ゆっくりと振り返り、制止するように左手を上下にゆっくりと大きく振りました。
「分かっておる。分かっておる、三木殿。もうよい。やめられよ。確かに大名の中にもデウスの教えに心惹かれる者がたくさんおる。わたしの友、小西殿も心からの吉利支丹であり、大谷殿もデウスの教えに心動かされておる。さりながら、三木殿。太閤殿下は吉利支丹が赦せんようになってしまったのだ。太閤殿下は、そなたら吉利支丹の両耳と鼻をそぎ落とし、磔にせよとまでおっしゃっておるのだ。」
ポオロは、唱えることをやめると、静かに、やさしく、自分自身に言い聞かせるようにつぶ

やきました。
「治部様。赦しの心こそ、デウス様の御心そのものでございます。秀吉様はわたしたちを赦せぬとお思いでしょうが、わたしはわたしに災いとなる人であっても、すべての人を赦して神の國に昇りたいと思います。」
　これを聞いた三成は、諦めたように小さく息を吐くと、静かに石牢の前から立ち去って行きました。
　一五九七年慶長二年、左耳だけをそぎ落とされたポオロ三木は、ともに囚われた二十四人とともに堺、大坂、京でさらされました。その後、長崎に向かって長い道のりを歩かされ、西坂に辿り着き、遂に高い十字架に縛り付けられていました。朝焼けで赤く染まっていた空がだんだん明るくなり、寒風が吹き渡る中、処刑を待つポオロの脇腹には、冷たく光る二本の長槍が突きつけられていました。縄できつく首を縛られていたポオロは、両手を合わせて見守る数千人の群衆に向かって、最後の力を振り絞って叫びました。
「わたしは、言われたようなルソン人にはあらず。日本の吉利支丹ポオロ三木である。わたしは、この命を捧げることを恐れてはいない。わたしは、吉利支丹であるがゆえに殺されることを幸せに思い、わたしを殺す全ての人々を、デウス様の名において赦す。デウス様、全ての人をパライソにお導きください。」
ポオロが言い放った赦しの声が響きわたると、二本の長槍が脇腹から心臓を貫きました。ポオロは一旦のけ反り、体を震わせながらぐったりと頭を下げました。ポオロの口からほとばしる真っ赤な鮮血は、顎先を伝わり落ち、胸元にかけられたロザリオを包み込んで、美しい銀色の光を覆い隠していきました。
　群衆を堰き止める竹矢来の外では、たくさんの人々がおののき見つめていました。その中に、目をそらさずにじっと見ている一人の若者がいました。それは、レウコ結城と呼ばれた二十三歳の若き吉利支丹でした。レウコは同じ阿波國出身の修道士であるポオロのことを慕い、共に神学を学んでいました。ポオロが囚われたことを知ったレウコは、処刑場まで駆けつけてきていました。十字架に縛り付けられたポオロの骸を見つめるレウコの頬には、悔恨の涙が流れていました。
「ポオロ様、わたしは卑怯者です。臆病者です。あなた様やパードレ様を見殺しにしてしまいました。わたしも今すぐ皆様とともに神の國に参ります。」
そう言って飛び出そうとするレウコに、お供のミカエル草庵は後ろから必死に抱え着きました。
「レウコ様、なりません。今出ていくと、あなたのお命はありません。生きてポオロ様のお心を受け継ぐのです。それができるのは、レウコ様しかございません。」
レウコは、ミカエルを払いのけようと体を捩ったため、二人とも前のめりに倒れ込んでしまいました。
「放せ、放すのだ、ミカエル。」
「いいえ、放しません、レウコ様。短慮はなりません。デウス様のお教えを広めるのです。」
覆い被さるように力いっぱい引き留めるミカエルもまた、涙を流していました。
「ポオロ様、申し訳ございませぬ。申し訳ございませぬ。」
そう言って、レウコは地面に深く爪を立て、這いつくばったまま、動かなくなってしまいました。
　レウコは見物の人々が消え去り、誰もいなくなった丘の下で力なく座り込んでいました。空が暗くなり始める頃、ふらふらと立ち上がったレウコは祈りの言葉を唱え出しました。いつしか黒い空から、白い花びらのように清らかな雪が舞うように降り、やがて、修道服の肩にうっ

すらと積もりました。レウコは小さな声でつぶやくように語り始めました。
「今日、この日のことは、決して忘れまい。ポオロ様や皆様のことは、私の心に深く悲しく刻み込む。太閤秀吉様はこの世の名を慶長と名付けられたが、私にはとてもそうとは思えない。私は心の底から慶ぶことなど、今後、微塵もないであろう。ましてや一体、どんな慶びが長らえるというのか。わたしは暗闇の中に生きる。それは、わたしの心の暗闇である。私は、今日から不慶と名乗る。一生涯、決して慶ぶことなどない、わたしはレウコ不慶である。」

二　訣別

一六〇一年慶長六年、伴天連取締が厳しさを増し、不慶は伊東マンショ、中浦ジュリアンらとともにマカオに移り住んでいました。神学を学び続けているレウコのもとに、都のミカエル草庵より京の都の様子を知らせる書状が届きました。神学校の小さな部屋にいた不慶は、むせ返るような湿った暑さの中で草庵からの文を食い入るように読んでいました。そこには、昨年美濃の関ヶ原で豊臣と徳川の大戦があり、石田三成様が六条河原にてご切腹、徳川家康様が天下人となられた、と記されていました。そして、徳川家臣板倉勝重が京都所司代になったとも付け加えられていました。板倉勝重は不慶ら吉利支丹とは旧知の仲で、教会の支援をしてくれた武士でした。
「なんということ。あの治部様がご切腹。天下人は徳川様。京都所司代は板倉勝重様か。これは、急いで、京に戻らねばならぬ。板倉様であれば、きっとわたしたちのことを分かってくださる。」
不慶は、書状から目を上げると、小さな窓から見える港の船に目をやりました。そして、大きく息を吸い込みました。

マカオを出帆し、京に戻る途中、不慶は故郷の阿波に立ち寄りました。八月十五日夜、不慶は小松島千代に隠居中の蜂須賀家政を訪ねました。辺りは昼のように明るく、海からの生暖かい風が松林に当たり、囁くように聞こえました。不慶が待つ客間に急ぎ足で入ってきた家政は、童のような笑顔で話しかけました。
「おお、レウコ、戻ったのか。」
「はい、太守様、先日マカオより立ち戻りました。」
不慶も、珍しく笑顔で答えました。
「そうか、よう戻られた。徳島城下は賑やかであったであろう。」
「はい。町の衆がたくさん繰り出して踊り出し、ご城下全体が鳴り物と掛け声で活気に包まれておりました。」
「そうであろう。徳島の城が出来上がってから、町並みも整い、領民にも豊かさが生まれてきたのう。」
家政は、得意げに言いました。
「太守様、真にその通りにございます。新しい町並を見ていると、安土のご城下に戻ったような思いがいたしました。」
不慶は、懐かしそうに宙を見上げました。家政は、愁いを含んだ不慶の様子を見て取ると、急にはずんだような声で語りかけました。
「時に、レウコよ。わしは、もう太守ではないぞ。蜂須賀の家は、嫡男至鎮に任せておる。今は楽な隠居の身で、日々、大神子小神子辺りで釣り三昧じゃ。名も蓬庵と名乗っておる。」

家政は、丸めた頭を悪戯っぽく撫でまわしました。不慶は笑いを堪える様にうなずき、躊躇いながら尋ねました。
「ほうあん、ホアン様でございますか。たしか、そのお名は……。」
「気付いたか。われら吉利支丹には、この名の意味が伝わるのう。」
レウコと蓬庵は、互いの顔を見ると声を合わせて笑いました。ほあんという名前はホアンという洗礼名を捩ったもので、それは、蓬庵が息子の至鎮とともに、未だに吉利支丹であり続けるということの証でした。
「蓬庵様。いかにも、よき御名にございます。わたしは、今は不慶と名乗っておりまする。」
「不慶とな。慶ばしくない、と書くのか。それは、また、どこか不吉な名のようにも思えるが、いかがしたのじゃ。」
と、家政は心配そうに眉を顰(ひそ)めました。
「蓬庵様、わたしはこれでよいのです。そんなことより、マカオで学んだ大切な神のお言葉をお伝えいたします。」
そう言って、不慶は話を切りました。不慶は、秀吉が家政の父小六正勝の盟友であり、蜂須賀家の恩人であったことを十分に分かっていました。
「そうか。よし、レウコ、そなたが南蛮で学んできたデウスの教えを聞かせてもらおう。楽しみにしておったのじゃ。おお、それと、今日はもう一人客人が来ておる。そなたにとっても大切なお方じゃ。公方殿、入られよ。」
家政はそう言って、奥の座敷に声をかけました。すると、開いた襖の陰から身なりのよい男が静かに入ってきました。
「レウコ、久しいのう。」
そう言って入ってきたのは、不慶の妹祐賀の伴侶、義兄弟であり主筋に当たる平島の足利義種でした。
「公方様。」
不慶は、あわてて向きを整え、ひれ伏しました。
「よいよい、気を遣わずともよいのだ。蓬庵様からお知らせを頂いて、楽しみにしておったのじゃ。私にもデウス様のお教えを聞かせておくれ。」
「公方様、蓬庵様、ありがとうございます。それでは、私が学んできたデウス様のお言葉をお伝えいたします。奇しくも、南蛮では今日は聖母被昇天の日にございます。」
そう言って、不慶は聖母の祈りについて話し始めました。
「マリア様、恵みに満ちた方、神はあなたとともにおられます。
あなたは祝福され、御子デウスも祝福されています。
デウスの母マリア様、わたしたち罪びとのために、今も死を迎える時も、お祈りください。」
家政と義種はうなずきながら、夜が更けるのも厭わずうれしそうに聞き入りました。

一六一二年慶長十七年、徳川幕府二代将軍秀忠は吉利支丹禁教令を発し、京の都は再び吉利支丹取締りに揺れていました。有馬のセミナリオで布教活動をしていた不慶は捕らえられ、高山右近らとともにマニラへ船で追放されることになりました。
「右近様、お体は大丈夫でございますか。」
不慶は、荒ぶる波に翻弄される船底で、病の高山右近を見舞っていました。
「レウコよ、豊臣はもう、終わりじゃ。徳川は、大坂のお城を丸裸にしおった。次の夏には、必ず大坂城は落とされよう。されば、秀頼様もご無事では済まぬであろう。そして、いよいよ、

天下は徳川家のものとなる。」
右近は、体を力なく横たえ、うつろな眼差しで宙を見つめて言いました。
「右近様、しっかりなさってください。もうすぐマニラでございます。今しばらくのご辛抱でございます。」
不慶は、力を込めて右近の手を握りしめました。
「レウコ、わたしは何の悔いもない。吉利支丹として神の國へ向かっているのだ。豊臣を救えなんだは心残りではあるが、デウス様のおそばに上がると思えば、これ以上の幸せはない。」
右近の顔にはかすかに笑みが浮かんだように見えました。
高山右近はマニラに着いてまもなく、快復することなく神の國に上りました。マニラの吉利支丹は全市をあげて右近の葬儀を執り行い、祝福しました。亡き右近に祝福の祈りを捧げ続ける不慶は、論語抄など本朝古典のラテン語翻訳に勤しみ、司祭へと昇りました。

一六一六年元和元年、京にいる吉利支丹の窮状を伝えられた不慶は、再びマニラから長崎に戻りました。京のだいうす町へ向かう途中、阿波国平島の足利家にいる妹の祐賀を密かに訪ねました。古津の港に降り立った不慶は、辺りが薄暗くなった夕刻に祐賀の住む屋敷に入りました。
「祐賀、戻ったぞ。」
いつの間にか祐賀の後ろに現れた不慶は、音を立てずに座りました。
「兄上、ご無事だったのですね。」
祐賀は、驚いて振り向くと、素早く不慶に近づきました。
「ジュスト右近様は、マニラにて全ての人に祝福されながら神の國に上られた。」
「なんということでしょう、あのジュスト様がー。高槻の皆様方は、さぞお嘆きのことでしょう。」祐賀は、ロザリオを胸の前に捧げ、両手で固く握りしめました。不慶は、祐賀を見つめながらゆっくりと優しい声で問いかけました。
「祐賀、そなたの近くは変わりはないか。」
「はい。わたしは当主義種とともに、変わりなく過ごしております。子の又八郎は元服し、足利義次と名乗っております。娘のとめは、高松藩生駒様のご家来豊嶋五郎衛門様に嫁ぎました。」
「そうか、皆ご無事なのじゃな。よかった。」
そう言って不慶は、小さく膝を叩きました。祐賀は、不慶に顔を近づけ、小さな声で問いました。
「兄上様は、どうしてお戻りなされたのですか。これから、どうなさるおつもりなのですか。」
不慶は、祐賀の顔をじっと見つめたまま、黙っていましたが、やがて静かに語り始めました。
「祐賀、私は今、不慶と名乗っている。しかし、これは憚りの名じゃ。慶長の世となり、ポオロ三木様がパライソに召されたときの最後のお言葉は、『すべての人を赦す』であった。しかし、わたしは、どうしても、ポオロ様のように赦す心をもつことができなかった。そのときの悲しみを忘れまいと、不慶と名乗っているのだ。この名の通りに生きて、わたしは、ポオロ様やパードレ様のお心を継ぎ、デウス様を奉る全ての人に神の秘蹟を授けたいと考えている。祐賀、今日が最後だ。今から、私は結城喜太郎朝能ではなく、レウコ不慶として生きる。そなたら平島の皆様に迷惑がかからぬよう、足利家とは縁もゆかりもない人間となるのだ。祐賀、よいな。」
不慶は、縋る祐賀に別れを告げると、平島屋形を出て、北を目指し、暗闇へと消え去っていきました。

三　受難

一六一九年元和五年、京の都には吉利支丹取り締まりの嵐が吹き荒れていました。京都所司代板倉勝重は、二代将軍秀忠の厳しい叱責に押されて、都の吉利支丹を捕らえていました。十月六日昼、吉利支丹五十二人は六条河原に集められ、横一列で丸太に縛り付けられました。身動きできぬ人々の足下には、すぐ下まで薪が積まれていました。それは、火が点けられたとき、炎が一気に身を包むほどに大きくなり、苦しむ時間が少しでも短くなるようにとの板倉勝重の情けでした。河原の上に設けられた陣幕の内では、うつむき加減に床几に座り込んで動かない勝重がいました。しかし、夕刻となり東山から鐘の音が響くと、勝重は遂に立ち上がり、祈りの言葉を唱え続ける人々に向かって叫びました。

「すまぬ、わしにできることは、ここまでが精一杯じゃ。最後にもう一度だけ尋ねる。一人でもよいのだ。だれか教えを捨てられぬのか。」

しかし、それに応える声はありませんでした。かわりに、祈りの声が繰り返し響きながら波のように押し寄せてきました。

オグロリヨサ　ドミノ　エクセンサ　スンペラ　シーデラ
キテ　キャンペ　グロリデ　ラタステ　エサクラ　オーベリ　パライソ
まいろうや　まいろうぞ　神の國にまいろうぞ
神の國とは申すれど　遠き國とは申すれど
まいろうや　まいろうぞ　デウスの國に　まいろうぞ

祈りの歌が重なり合い、大きな波となって響き渡る中、薪に火が点けられました。火は折からの乾いた西風に煽られて、一気に大きな炎となり、京の都の夜空を赤く焦がしました。燃えさかる猛火の中で人々の体は灼かれ、数千人の人々が見守る中、もがきながら昇天していきました。

夜、必死の思いで北国から京に辿り着いた不慶は、土手の上にいました。不慶は何一つ動かなくなった河原を見つめたまま立ちすくんでいました。鴨川の水はさらさらと流れ、乾いた風が河原の石を撫でる様に柔らかく吹いています。半月の白い光に照らされ、焼かれた人々の体が点々とぼんやり浮き上がって見えていました。まだ白く薄い煙が、ところどころで細く立ち上り、風に揺れていました。不慶は、おぼつかない足取りで河原に降り立ち、無造作に横たわる黒々とした塊を一つ一つさすりながら、涙を落とし続けました。

「皆様、お助けすることができませんでした。皆様の最期に間に合わず、祈りを捧げることさえできませんでした。皆様、本当に申し訳ございませんでした。わたしも、皆様とともにパライソに昇りとうございました。」

不慶は、お供のミカエル草庵とともに焼け爛れた骸を大切に抱え、臨終の際に塗るべき香油を一つ一つの骸に塗り続けました。その中に、しっかりと抱き合って一つになったまま息絶えたであろう母親と子どもの骸を見つけました。首らしきところには、見覚えのあるロザリオが、かかっていました。それは、不慶が秘蹟を授けた母親のテクラと子どものルチアに違いありませんでした。

「テクラ、ルチア、ここにいたのですね。熱かったでしょう。苦しかったでしょう。神よ、この二人をパライソにお導きください。神よ、全ての者を受け入れ、お赦しください。」

骸を抱えて泣き崩れる不慶の手に、ルチアが握りしめていたであろうメダイが転がり落ちてきました。不慶は、二人の額に香油を丁寧に広げると、メダイをルチアの口の中に含ませて、祈りの言葉を唱えました。

オグロリヨサ　ドミノ　エクセンサ　スンペラ　シーデラ
キテ　キャンペ　グロリデ　ラタステ　エサクラ　オーベリ　パライソ
まいろうぞ　まいろうや　神の國にまいろうや

不慶はミカエル草庵らとともに、全ての亡骸を六条河原から下京まで運びました。そして、祈りを捧げながら一体一体丁寧に埋葬しました。

一六二二年元和八年、不慶は京の町家に隠れ住み、刻々と変わる吉利支丹取締りの情勢についてラテン語で報告書を書いていました。しかし、長崎から一通の手紙が届くと、不慶のペンは止まり、何度もそれを読み返しました。そこには、長崎西坂で再び五十五名の吉利支丹が囚われて処刑されたことが記されていました。不慶は、そこに書かれていた顛末を知り、これまでとは違う恐れを抱きました。

「不慶様、どうなされたのですか。お顔の色が優れませぬが。」

傍にいたミカエル草庵は不慶の顔を見つめました。

「草庵、わたしは、神の國に召されることは何も恐れない。できうるならば、ポオロ様や殉教した皆様とともにデウス様の元に早く参りたいとさえ思っている。しかし、これまで宿主として世話をしてくれた者一家全員の命を奪うというやり方は絶対に受け入れることができない。司祭の世話をしただけの女子や幼き子どもに一体何の罪があるというのか。わたしは、わたしを助けてくれた人々まで巻き込まれて殺されてしまうことは、何としても避けたい。」

不慶は草庵の視線を避ける様に顔を伏せ、ロザリオを握りしめました。

四　門内の苦悩

一六二三年元和九年、江戸では、徳川家光が三代将軍となりました。十二月四日、家光は江戸品川芝口に修道士を含む吉利支丹五十名を集め、諸大名が見ているまで火炙りにしました。阿波藩三代藩主蜂須賀忠英ら若き藩主たちも、呼び出され処刑の様子を見せつけられました。丸太柱に括りつけられた吉利支丹の中に、女子供に交じって一際がっしりとした体つきの男がいました。よく見ると男の手足の先は丸く、指は一本もありませんでした。その男は群衆に向かって大きな吠えるような野太い声で叫びました。

「わしは、神君家康公の代から徳川家に仕えた原主水である。関ケ原の戦い、大坂攻めと命を懸けて奉公してまいった。されど、見よ。もはやわが手足の指は一本もなく、足も動かず。これは、デウス様を信じたが故の仕打ちである。しかし、わたしは今、本心から幸せである。デウス様の名のもとに死するは、この上なき勝ちである。」

男の口上が響き渡ると、足下に積まれた薪に火が点けられました。火は、乾いた冷たい北風に煽られて、瞬く間に燃え上がり、祈りの声と言葉にならない悲鳴をかき消しながら、何もかもを焼き尽くしていきました。戦を知らぬ若き藩主らは、もがきながら人々が燃え尽きるさまを息を飲んで見届けました。

藩内に多くの吉利支丹を抱える忠英は寒々とした思いで阿波へと帰還しました。

「大変なこととなった。上様は生まれながらの将軍として、容赦なき仕置きをなされる。これは、江戸での仕置きのように、それぞれの領国内において全ての吉利支丹を厳しく取り締まれということじゃ。わが藩は、どのようなことがあっても、必ず藩祖蓬庵様と領国を守り抜かねばならぬ。」
忠英は、徳島城本丸御殿において居並ぶ家老らに厳しい口調で命じました。

一六三四年寛永十一年、将軍家光の命を受けた長崎奉行榊原飛騨守らの探索方与力が讃岐を経て、阿波国に入り、藩主忠英に拝謁しました。
「阿波守様には、ご機嫌麗しく、恐悦至極にございます。」
と、与力は庭先から平伏したまま挨拶を述べました。それを受けて、御簾の前に控えていた家老の長谷川越前が尋ねました。
「お役目ご苦労にございます。面を上げられよ。して、この度は、どのようなお役目で見えられたのか。」
「某は、ご公儀の命により伴天連レウコの探索にまかり越してございます。レウコは阿波の生まれとのこと。確か、阿波においては先々代蓬庵様、先代至鎮様は元吉利支丹、平島の足利家にも吉利支丹がござったと聞き及んでおりまする。ご領内における吉利支丹の取り締まりはいかがなっておられますか。」
と、与力はまだ平伏したまま答えました。
すると、忠英のすぐ側に控えていた賀嶋主水正が気色ばんで大きな声を出しました。
「無礼であろう。先代至鎮公は今は亡きお方、興源寺の五輪塔にて安らかに祀られておいでじゃ。藩祖蓬庵様は、ご城下を離れて千代にて仏門に入り、ご隠居あそばされておる。」
「これは、失礼をいたしました。お二方とも、デウスの教えを捨てられたのでございましたな。では、御家来筋衆の平島足利家は。」
と、顔を上げた与力はなおも食い下がりました。
「平島のことは一切知らぬ。松平蜂須賀家とは関わりはない。はなはだ迷惑じゃ。」
と、長谷川越前は、吐き捨てて横を向きました。
「そうでございますか。存ぜぬこととは申せ、誠にご無礼つかまつりました。それでは、平島に赴いて直接詮議することといたしましょう。確か、天下にただ一人となった最後の伴天連レウコ結城は阿波足利家に連なる者であったとか。その妹祐賀様も同じ吉利支丹と調べがついております。」
と言って、与力は立ち上がろうとしました。
　すると、御簾の向こう側から忠英が長谷川越前の向かいに侍る賀島主水正に小声で何かを伝えました。主水正は、与力に向かって静かに口を開きました。
「待たれよ。平島の足利家は、元をたどれば武家の棟梁、東照大権現様と同じ源氏のお血筋、それを詮議しようというのか。将軍家はご存じのことであるのか、との仰せである。」
「ははっ。これは誠に恐れ入りましてございます。確かに、足利家は高貴なお血筋、平島行きは将軍家の許しを得てからということにいたします。それでは、われらはこれより、大坂の峠を超えて、讃岐の吉利支丹探索に合流することといたします。」
一旦座り直し、頭を下げた与力は、そう言い残して、下がっていきました。
　与力が去った後、黙って腕組みをしたままの長谷川越前と賀嶋主水正を前にして、忠英が口を開きました。
「いかにもこれは、まずいこととなった。家光公は先年、江戸品川の芝口で百名を越える吉利

支丹を火炙りにしおった。家康公に仕えて功を挙げた旗本や、幼子とその母も容赦なく無残に灼き殺された。家光公は顔色一つ変えず、それを眺めておったわ。あれは、われら外様の大名への脅しじゃ。将軍家を甘く見るなと言いたかったのじゃ。そう言えば、確か先々代蓬庵公の隠居所に足利家一門のレウコ結城と申す伴天連がやってきて、デウスの教えを説いたと聞く。未だにその者は囚われておらぬのではないか。」
忠英からの視線を受けた賀嶋主水正は、両手をついて上目遣いに忠英を見て答えました。
「殿、平島は些か信用できませぬが、その家来に荒川門内という者がおります。」
「主水正、そやつが、どうしたのじゃ。」
「門内は、人柄実直、誠の心をもつ賢き屈強なもののふでございます。」
「その者をどうするというのじゃ。」
忠英は、眉間に皺を寄せて言いました。
「その者に平島の始末をさせるのです。不慶を捕えさせるか、または、見つけさせ、口を封じさせるか。いずれにしても、足利の家を守らせるのです。」
と言うと、主水正は長谷川越前に目配せをしました。すると、今度は、長谷川越前が背筋を伸ばし、ゆっくりと口を開きました。
「近頃、ご公儀は吉利支丹を磔にせぬようになりました。それは、吉利支丹の団結を恐れてのことでございます。磔にするとそれを見ている民衆の心に、吉利支丹としての誇りが生まれて更なる信仰の熱がこもるとのことです。そこで、殺すよりも、転ばすことに重きを置いておる由にございます。」
「転ばすとは、どういうことじゃ、越前。」
忠英は、腕を組んで越前に顔を向けました。
「みじめに教えを捨てさせ、デウスと仲間を裏切らせるのでございます。そうすれば、二度と吉利支丹仲間には戻れなくなりまする。不信を作り出し互いに憎しみ合わせ、仲違いをさせて芋づる式に根こそぎつぶしてしまおうとする妙策でございます。」
越前は、したり顔で忠英を見つめると、さっと頭を下げました。
「ほう、うまく考えたものじゃ。そう言えば、長崎奉行の水野河内とやらがデウスやマリアの絵をあしらった絵踏みなるものを考え出して、それを決まったときに吉利支丹を捨てた者に踏ませ続けていると聞く。」
と、忠英はあきれたように言いました。
越前は、忠英の言葉が終わるか終わらぬうちに続けて言いました。
「長崎奉行の竹内采女正は、転ばすための穴吊るしという責め苦を考え出したそうでございます。これにかけられると、どんな吉利支丹でも音を上げて転ぶと言われておりまする。フェレイラとか申す大物伴天連も、二時ともたずに転んだそうでございます。」
越前の話を聞いて、しばらく黙り込んでいた忠英は意を決したように言いました。
「幕府もいよいよ本気で取り締まりを始めたと言うことか。わが藩もうかうかはしておれぬ。ご公儀に睨まれてお取りつぶしなどと言う憂き目に遭わぬよう領国内を引き締めるのじゃ。そして、必ず藩祖蓬庵様をお守りせねばならぬ。主水正、門内を使うことを許す。不慶をどうするか、厳しく見張るのじゃ。少しでもおかしな素振りを見せたときは、主水正、分かっておるな。二人ともわが藩が仕置きするのじゃ。そして、そうなったときは、この際、平島のことも一気に片を付けてしまのだ。」
三人は、顔を見合せると、同時にうなずきました。

平島屋形には不慶の探索をしている奉行がいるとの知らせが届いていました。しかし、家老の長谷川越前の書状で、徳島城内でのやりとりが知らされ、阿波足利家は大騒ぎとなっていました。

「母上、叔父不慶殿のせいでわが足利家はお取りつぶしとなるやもしれませぬ。いや、わたしは切腹、母上や妹のとめは火あぶりとなるやもしれませぬ。」

と、足利義次は大慌てで奥座敷に走り込んできました。

「公方様、落ち着いてください。何があったというのですか。」

祐賀は、たしなめるように息子の義次を制しました。

「徳島の長谷川越前様から知らせがあり、長崎奉行が母上の兄、レウコ結城の探索をしているとのことでございました。さらにわが足利家にまで吉利支丹の嫌疑がかかっておるとのこと。一体、どうすればよいのでございますか。」

義次は、顔を紅潮させて唇を震わせました。

そこに、賀嶋主水正より知らせを受けて駆けつけた荒川門内が割って入りました。

「お屋形様、この門内にお任せください。必ずや先に不慶様を探し出し、足利家に難儀がかからぬようにいたします。」

「何だ、門内。難儀がかからぬとは、どうするのじゃ。」

義次は、怒気を込めて問い詰めました。

「不慶様がご公儀の手にかかり、厳しい詮議を受け、ありもしないことを吐かされたりすると一大事にございます。先に不慶様を見つけ出し、デウスの教えを捨てて頂き、何としても足利家をお守りいたします。」

「そうか。しかし、万が一、不慶がお主のいうことを聞かず、教えを捨てぬと言い張った時はいかがするつもりじゃ。」

「それはー。」

門内は答えに詰まってしまいました。

「そのときは、分かっておるな、門内。其方も古くは足利の血を引く一門である。不慶一人の命より、足利の家を守るのじゃ。」

義次は、震える拳を強く握りしめて厳しい声で言い放ちました。

「そんな、公方様。わが兄を、叔父レウコ様をお見捨てなされるのでございますか。」

そう言った祐賀は声も出せず、ただ泣き崩れました。

二人の間に挟まれた門内は、もはや何も言えず、ただ平伏するのみでした。

小さく畏まった門内に向かって、義次はさらに畳み掛けるように言いました。

「門内、其方は今から長崎奉行探索方を追いかけ、わが足利家の立場を説くのだ。ご公儀に従い、不慶を探す手伝いをせよ。何としても、足利家にかけられた嫌疑を晴らさねばならぬ。」

平島の屋形を出立し、讃岐へと向かう門内の足取りは大変重いものでした。空は黒く厚い雲が立ち込め、梅雨時の大雨が続いていました。吉野川は水かさが増え、濁った水が逆巻くようにうねり流れていました。激しい雨を受けながら、門内は急ぎ足に長崎奉行ら一行を追いかけていました。

（不慶様も足利家も守るためには、一体どうすればよいのか。）

門内の頭の中では、祐賀や義次のやりとりが何度も駆け巡っていました。

徳島城下を避け、眉山の南麓を廻り、鮎喰側川沿いに国府に出たところで門内の考えは定まりました。

（うむ、足利の家も不慶様も両方、必ずお守りするのだ。これより他の道はない。それには、やはり、まず、ご公儀に従う姿を見せねばならぬ。長崎奉行探索方を追いかけ、一刻も早く足利家の立場を申し入れるのだ。）
門内は吉野川の大水で渡れなくなっている名田の渡しを避け、善入寺島を越えて、日開谷川沿いに真っ直ぐ讃岐へ向かう道を選びました。名田の渡しで足止めされていた上に大坂峠で難渋していた長崎奉行探索方一行を日開谷越えで一気に追い着いた門内は、讃岐大内に先回りし、馬宿の陣屋で待つことにしました。
　陣屋に到着した長崎奉行探索方に目通りがかなった門内は、おもむろに切り出しました。
「わたしは、阿波足利家に使える荒川門内と申す者にございます。伴天連不慶について、申し上げたきことがございます。」
門内は、土間に片膝をつき、与力を見上げて言いました。
「不慶とな。その方、不慶について何か知っておるのか。」
上段の座敷に座っていた探索方与力は、身を乗り出して尋ねました。
「ははっ。お探しの伴天連不慶はわれらの主君阿波足利公方家の仇敵にございます。」
「なんと。不慶は、そなたの主筋に当たる阿波足利家の御台所、祐賀殿の兄ではござらぬか。」
探索方の与力は驚いたように言いました。
「いかにも。しかし、伴天連不慶は、足利喜八郎朝能。前の将軍足利義昭殿の甥にございまする。京足利家はわれら阿波足利家にとっては、都から三好を追い払い将軍職を簒奪いたした憎き仇敵にござりまする。」
門内は、腹立たしそうに掌で土間を一つ打って見せました。
「そうであったとしても、主筋にあたる不慶をそのように罵ってよいのか。」
与力は、なおも信じられぬという疑いの目で門内を見下ろしました。
「主君足利義次は、公方家を守るためならば切腹も厭わない覚悟でございます。命を懸けて、足利家に懸けられた疑いを晴らし、何としても一門を守り抜く決意にございます。」
門内は、義次より託された書状を両手で差し出し、与力に手渡しました。その書状には、義次の覚悟と花押が確かに記されていました。
「ううむ。確かにこれは、義次殿の誓詞である。この書状は、長崎奉行榊原様にお届けする。確かに不慶の捕縛に助力してくれるということなのじゃな。」
と、探索方は腑に落ちぬ様子で、疑い深そうに尋ねました。
「いかにも。これは、阿波足利家の総意にござります。」
門内は落ち着いた声で答えました。
「そこまで申されるならば、不慶の居所も我らに言えるであろう。」
与力の声は厳しさを増しました。
「それは、不慶も我等のことを警戒しておりますので、知らせてくることはございませぬ。」
門内は、困ったような表情を作って顔を伏せました。
「ふうむ。なるほどのう。それでは、もし不慶の動きが分かったならば、どんな小さなことでもすぐに知らせよ。もし、隠し立てすると、阿波足利家だけではなく、蜂須賀家にも難儀が降りかかろうぞ。」
与力は不信感を露わにして、門内にくぎを刺しました。
「心得てございます。確かに申し受けました。」
門内は、与力の鋭い眼光を見とめると、深く一礼をして下がりました。

讃岐大内から平島屋形に取って返した門内は、長崎奉行探索方の動きを祐賀だけに伝えることにしました。
「祐賀様、ご公儀は本気にござります。かならずや不慶様を捕らえんと構えてございます。」
「門内、どうすればよいのでしょう。」
祐賀は、首を左右に力なく振りました。
「されば、道はただ一つ。決して不慶様の居所を知られないことです。一旦、知られれば、必ずや探索方は不慶様を捕らえてしまうでしょう。厳しい責め苦を受ければ、いかに不慶様でもこれまで世話をしていた祐賀様や阿波足利家に教えを説いたことを漏らしてしまうかもしれませぬ。そうなれば、大変なこととなります。」
門内の声は、かすれていました。祐賀は、ロザリオを握りしめて言いました。
「門内、長崎や江戸での吉利支丹への仕置きは、火炙りや逆つるしを受けるそうな。それはそれはたいそうむごいと聞いています。それほど、厳しい探索と取り締まりを受け、兄不慶様は無事に済みましょうや。」
「祐賀様、それは不慶様だけのことではございませぬ。長崎の西坂では、吉利支丹より先に宿主や関わった者の首を刎ね、それを火炙りにされる吉利支丹に見せつけたとのことにございます。阿波足利家のわれらとて、他人事ではございませぬ。」
「門内、そのような話は聞きたくもない。デウス様だけは、女も子どもも、弱きものや病で苦しんでいるものも全ての迷える罪深きものを赦し、受け入れてくださるのです。われらは、ただひたすらにデウス様のお教えを受け入れ、祈っていただけではありませぬか。なのになぜ、そのような目に遭わねばならぬのじゃ。」
そう言うと、祐賀は、突っ伏して泣き崩れました。
「祐賀様、私は阿波足利家に仕えて五代目となる者にございます。わが荒川家の者は遠江にある頃より、いかなる時も足利家を守るためだけに生きて参りました。なんとしても、足利家の皆様をお守りし、不慶様もお守りして見せます。」
門内は、両手をつき、祐賀に力強く語りかけました。
「門内、兄不慶様のお命と阿波足利家の命運をそなたに委ねます。我らをお守りください。兄不慶は、讃岐高松の娘とめのところに、昨年立ち寄ったとの知らせがありました。高松へ向かい、とめにお会いください。」
門内は、黙ってひれ伏し、平島屋形を後にしました。

門内は再び、阿波と讃岐の国境を越え、高松に向かおうとしていました。強い夏の日差しを受け、門内の背中は水を被ったように濡れていました。
「祐賀様には、あのようなお約束をしてしまった。しかし、不慶様にお会いしてどうすればよいのか。いっそ、お命を頂戴してしまえばー。いや、それはできぬ。元を辿れば、不慶様は阿波足利家が将軍家に復することを信じて京に上り、吉利支丹になられた方。しかし、それも、今となってはー。いや、繰り言を考えても儘ならぬ。まずは、不慶様にお会いせねば、何にも始まらぬ。」
門内は日開谷の北にある境目峠の大銀杏の下に座り込み、流れ出る汗を拭いていました。懐から刻み煙草の包みを取り出し、煙管に詰めると火打石を一打ちして火を点けました。門内がゆっくりと煙草を燻らせていると、一人の旅人が近づき、声をかけてきました。
「すまぬが、火を分けてもらえまいか。」
「あなた様も嗜みなさるのか。」

門内は、横に座り込んだ男に話しかけながら、気さくに煙管の火を差し出しました。
「恐れ入る。助かり申した。」
男はそう言うと、煙管の先を合わせ、すっと息を吸い、火を移し取りました。二人は息を合わせるように、煙草の煙を吸い込み、同時に長くはき出しました。二人の息は細く一筋の白い煙となり、ゆっくりと巻きあがり二人を包み込むように薄く広がりました。門内がふと男の方を見ると、こめかみに穴を空けられたような赤黒い傷跡がありました。
「そなたのこめかみには妙な傷があるが、けがでもされたのか。」
門内は不思議そうに尋ねました。
「ああ、これですか。これは、わたしの魂が抜け出た穴の跡でございます。」
男は、すねたような笑いを浮かべて、傷跡を手のひらで押さえて隠そうとしました。
「魂が抜け出る？一体、何を言っているのだ。」
気味が悪くなった門内は、男から少し体を離して問いました。男は、門内の問いには答えず、笑顔に似合わない鋭い眼差しで笠の下の門内の顔を覗き込みました。
「ふうん。あなた様は、お侍でございますか。」
「なぜ、そのようなことを。」
門内は怪訝な笑みを浮かべて、問い返しました。
「身なりは旅人だが、体のこなし方が違います。何より言葉遣いがお侍そのままでございます。」
と、男は、あきれたように笑いかけました。
「旅人には見えぬか。いかにも、わたしは阿波平島家に仕える者である。」
と、門内は答えてしまいました。
「阿波平島家？というと、阿波の足利公方家ご家中の方でございますか。それでは、不慶という者をご存知ですか。」
男は驚いたように問いかけました。すると、門内は、一気に立ち上がり、刀の柄に手をかけて問いました。
「だとすれば、如何する。そなたは、一体何者なのだ。」
「これは、ご無礼をいたしました。まず、まず、お座りください。わたしは、筑前長崎の九郎兵衛と申す者です。決して、怪しい者ではございませぬ。わたしは長崎奉行榊原飛騨守様のお手先として、不慶を探索しております。今は徳島城下を訪ねた後、讃岐高松の生駒家に立ち寄る途中です。その取り次ぎを豊嶋五郎右衛門様にお願いしておるのです。五郎右衛門様の奥方は、足利義種様のご息女だと聞いております。それで、つい、安堵してお尋ねしたのです。」
「そうでございましたか。これは、こちらこそご無礼いたしました。五郎右衛門様の奥方様は、とめ殿です。わたしも、よくしていただいたことがございます。」
門内は、心の内を悟られまいと、つくり笑いを浮かべました。
「ああ、やはりつながりのあるお方でございましたか。足利家も我らの探索に力を貸してくださるとのこと、与力の方々からお聞きし、心強い限りでございます。なにしろ、阿波も讃岐も見知らぬ土地で気が張っておりました。つながりがあるというだけで、何だかほっといたします。」
九郎兵衛は、困ったように笑いました。
「確かに、わたしも不慶を捕らえんと気が張っておりましたかもしれませぬ。」
「ところで、あなた様のお名前は。」
「わたしは、阿波足利家に仕える荒川正次門内と申します。」
「ほう、荒川殿でございますか。さて、どうしてこのような国境においでなのですか。」

「わたしも、とめ殿のもとへ向かっておる途中なのです。とめ殿のもとに不慶が現れるやもしれぬと。主の足利義次様の命を受け、讃岐高松に向かう途中です。」
「なるほど、不慶の探索に向かわれているのですな。それでは、豊嶋家までご一緒に参りますか。」
「いや、わたしは、大窪寺に立ち寄り、旅の願掛けをしてから参ります。」
「そうですか。それでは、わたしは一足先に高松に向かいます。道中お気を付けて。」
門内は、九郎兵衛と別れ、大窪寺へと向かいました。
「やはり、探索方はどこまでも調べるつもりだ。まだ、お若いとめ殿の嫁ぎ先まで手を伸ばしておる。これは、いよいよ急がねばならぬ。」
門内は、大窪寺を素通りして、真っ直ぐに高松へ向かって急ぎました。

新月の夜、門内は豊嶋家の離れで祐賀の娘とめと二人で話をしていました。
「とめ殿、お久しぶりにございます。」
「門内、よう来てくれた。母様はご無事か。父上のお体はお健やかか。」
「はい、お二人ともお元気にておいでです。しかし、。」
「しかし、とは？お二人ともお元気ではないのか。」
「お二人は大丈夫にございます。ただ。」
「ただ、どうしたというのですか。」
「レウコ様のことにございます。」
「レウコ様、というと叔父の喜八郎殿のことですか。喜八郎殿になにかございましたか。」
「レウコ様は今は不慶と名乗っておられます。不慶様は吉利支丹。長崎より探索方がやってきて、レウコ様、いや不慶様を捕らえんとしています。そのことで、阿波足利家や阿波蜂須賀家まで類が及ぶやも知れなくなっているのです。」
「えっ。母君や父君までですか。わが足利家は武家の名門。徳川も同じ源氏を名乗っているではありませぬか。それでもですか。」
とめは、驚きを抑えて門内に詰め寄りました。
「不慶様は、今や天下にたったお一人の伴天連にございます。ご公儀も何としても囚えて転ばせんと血眼になっているのでございます。」
「そうでございましたか。それで、門内も不慶様をさがしておるのですね。門内、そなたは不慶様を捕らえてご公儀に引き渡すつもりなのですか。」
「はい、阿波足利家、祐賀様、とめ様をお守りするには、長崎奉行探索方より先に不慶様に会い、何としてもデウスの教えを捨ててもらわねばなりません。捨てれば、不慶様も皆様も足利家もみな、厳しい仕置きを受けることなく助かるのです。わたしは、不慶様とともに奉行に名乗り出ます。これより他に道はございませぬ。」
「門内、それはまことなのですか。本当にみなが助かるのですか。」
「はい、必ずや助かります。わたしは、阿波足利家を守るための荒川家に生まれました。三河荒川民部正の代より、ただひたすらに阿波足利家をお守りして参りました。それが、我が荒川家の使命であり、誇りでございます。不慶様のお命も、阿波足利家の皆様のことも、この門内は命に代えても守り抜く覚悟にございます。」
「門内、そなたはわが足利家にとって、かけがえのない家人です。京より阿波に移り、みなが足利家を見捨てて去って行く中、足利の血を受け継ぐ荒川家だけは、真の忠心をもってお家のために尽くしてきてくれました。わたしは、荒川家、門内のことを父母と同じように心から信

じています。」
そう言うと、とめは門内に向かって深くお辞儀をしました。
「とめ殿、勿体のうございます。身に余るお言葉にございます。」
門内はとめより低く頭を下げて瞼を閉じました。
すると、とめは門内の方へにじり寄るようにして囁くように言いました。
「門内、実は不慶様は紀州加太の湊においでます。」
「えっ。行き先をご存じでございますか。」
「はい。紀州の岡籐左右衛門の船で吉利支丹の方々を訪ねていると聞きました。」
「岡籐左右衛門と申せば、確か阿波足利家にお仕えだった方でございますか。」
「そうです。吉利支丹として不慶様から洗礼を受け、そのことで平島屋形を追放された方でございます。今も、不慶様や吉利支丹の皆様をお助けしているとのことでございます。」
「そうでございましたか。それは、平島の者はだれも知りませんでした。」
「不慶様は、妹にあたる母祐賀様だけには迷惑がかからぬようにしておられましたから。門内、紀州に向かわれよ。そして、わが阿波足利家を、母様をお救いください。」
「承りました。この門内、命をかけて必ず皆様をお守りいたします。しかし、岡籐左右衛門は、わたしを警戒すると思います。問い詰めても、きっと不慶様の行方は漏らさぬことでしょう。」
「そうでございますね。」
二人は、しばらく黙り込んでいました。しばらくすると、とめは暗い目をして門内の顔を見つめて言いました。
「門内、わたしが母祐賀様に代わって、手紙を書きます。そして、不慶様のことと併せて、甥にあたる吉利支丹の勘右衛門様のことなど、ご加減を伺うことにいたしましょう。そして、文の中で不慶様と久しぶりに会えるよう頼んでみます。そうすれば、きっと岡籐左右衛門は、門内が不慶様に会えるよう手はずを整えてくれると思います。」
「とめ様、申し訳ございませぬ。門内は必ずや不慶様を説き伏せ、阿波足利家をお守りいたします。」
門内は、手紙を懐の奥深くに差し込み、とめと別れて豊嶋の家を後にしました。

五　捨身

門内は瀬戸の海を渡り、備前の船宿で長崎奉行榊原飛騨守一行に追いつきました。
船宿に着き、奉行らのいる座敷の前まできた門内は、縁側に正座して一礼をしました。
「平島阿波足利家に仕える荒川門内正次でございます。伴天連不慶の行方について申し上げたきことがございます。」
すると、与力の一人が門内の顔を覗くようにして答えました。
「おお、そなたは確か讃岐でお会いした門内殿。不慶の行方が掴めたのですか。」
「はい。不慶は紀州に潜伏してございます。」
奉行は与力を目で制し、一瞬間をおいて、静かに問いました。
「紀州と申されたが、不慶は、なぜそのようなところにおるのか。」
「ははっ。紀州は船を使うと阿波から近く、最も短きところは平島から海上十里ほどの船道でございます。そこには、わが阿波足利家から追放された吉利支丹の岡籐左右衛門が船を泊めております。その船にて不慶は移動しておるとのことです。」
「ほう。船か。して、その方はなぜ、そのようなことを知っておるのじゃ。」

そう言うと、奉行はじっと門内の目を睨みつけました。
「はい、わが主、足利義次様はこの門内にご公儀に従い不慶を捕らえるよう申しつけられました。主のお申し付けにより、讃岐の豊嶋家に嫁いでいる御台祐賀さまのご息女、とめ様のところに不慶が立ち寄っていないか問いただしてございます。すると、不慶が立ち寄った折、足利家を追放された岡籐左右衛門が同行しており、紀州に向かうと申したとのことでございます。」
「そうであったか。それで、わざわざ備前まで足を運んでくれたのだな。それは、ご苦労であった。しかし。その方は確か、阿波足利家に仕える者。本当に不慶や足利家中の者を裏切ってもよいのか。」
奉行は、怪訝な顔で問いました。
「はい、確かに不慶は祐賀様のお兄上にあたる方でございます。しかし、岡籐左右衛門と不慶は同じく吉利支丹にて、わが足利家にあらぬ難儀をかけ、仇なす者にございます。不慶を成敗できぬ時は、わが主、足利義次は切腹も覚悟にてございます。」
門内は、はっきりとした声で言い終えると、さっと顔を伏せました。
「よし、わかった。それでは、紀州に参ろう。門内、そなたは案内役を務めるのだ。皆の者、支度せよ。」
奉行は、ゆっくりと立ち上がり、与力らに命を下しました。
「ははっ。承知。」
与力らが声を合わせて答えると、そのやり取りを聞いていた門内は、やっと顔を上げて、最後に立ち上がりました。

一六三五年寛永十二年秋、門内は、長崎奉行探索方とともに、紀州加太港に着きました。
与力ら探索方は、紀州徳川家に慮り、不慶探索の許しを得るために大坂城代の下へと向かいました。探索方らが戻るまでの間、岡籐左右衛門を探索するよう命じられた門内は、加太の港を歩き回っていました。港の中に泊められた船の中に、一艘だけ阿波で見られるかんどり船を見つけ出しました。
涼しい秋の西風が吹き、夕暮れ迫る港の中は凪いでいました。艫綱のきしむ音が繰り返し小さく聞こえる中、門内は足音を立てずにかんどり船に近づきましたそして、船の中ほどに設けられた屋根の下で筵を掛けて横になっている男の足が見えました。門内は、その足に向かって、呼びかけました。
「もし、そこもとは阿波の方でございますか。」
急に声をかけられた男は、億劫そうに声のする方を見て答えました。
「たいそいのう。何故そのようなことをお尋ねなのかな。」
籐左右衛門に間違いないと気づいた門内は、改まって尋ねました。
「平島阿波足利家に仕える荒川門内と申します。岡籐左右衛門殿でございますか。」
すると、男は体を起こしながら声の主を探すような素振りを見せました。門内を見つけると、籐左右衛門は、驚いたような顔をして言いました。
「おお、門内殿お久しぶりにございます。いかにも、岡籐左右衛門にございます。立派になられましたな。まあ、こちらにお越しください。」
門内は、誘われるまま船に乗り込み、籐左右衛門の前に黙って座りました。
籐左右衛門は、やや強張った表情になり、門内に尋ねました。
「どうして、このようなところまで足を運ばれたのですか。」
門内は、籐左右衛門の顔から眼を逸らさずに答えました。

「平島の祐賀様に頼まれて、不慶様を探しております。」
「祐賀様に？不慶様を。なぜ探しておられるのですか。」
籐左右衛門は門内の顔を見つめました。
「祐賀様は、お体を持ち崩されて、兄の不慶様に会いたいと籐左右衛門殿宛に文をしたためられました。不慶様の行方を知っておるのは籐左右衛門殿しかいないとの仰せでございました。」
「そうでございましたか。それは、祐賀様におかれましては、お気の毒なことでございます。お体の具合は如何なのでございましょう。」
籐左右衛門の表情はやや緩みました。
「これが、祐賀様からの文にございます。」
と言って、門内はとめが書いた文を差し出しました。岡籐左右衛門は、感心して読み入りました。
「不慶様や甥の勘右衛門様のことが、気がかりでおいでるのでございますなあ。祐賀様は相変わらずお優しく。それにしても、祐賀様のお体は心配なことにございます。」
岡籐左右衛門は、感じ入った様子で門内に目をやりました。けれども、急に真顔になって尋ねました。
「しかし、なぜここがお分かりになったのでございますか。」
「祐賀様のお子のとめ殿のところにて、お二人が紀州に向かったとお教えいただきました。祐賀様の仰られますには、とめ様であればお二人の行方をご存知かもしれぬと―。」
「さすがは不慶様の妹御、祐賀様でございますな。わたしたちのことは、何でもご存知のようですな。」
籐左右衛門は、笑いを抑え込むように言いました。そして、門内に顔を近づけると、小声で囁きました。
「門内殿、実は不慶様は沖の小島に泊めている舟に乗っていらっしゃいます。」
「なんと、お近くにいらっしゃるのか。」
門内は驚いて聞き返しました。
「いかにも、それがしが、不慶様の足となってお役に立っているのです。今から、不慶様のところまでご案内いたしましょう。不慶様もきっとお喜びになります。平島の皆様方のことをお話ください。」
籐左右衛門は門内を連れて、一艘の小舟に漕ぎ着けました。
「今晩は。平島の者でございます。」
そう言って、門内は、しばらく静かに待ちました。すると、舟の上に設けられた小部屋の中から、年老いた男が少しだけ顔を見せました。
「どなたでございますか。」
その老人は、小さな声で問い返しました。
「荒川門内と申します。不慶様でございますか。」
また、しばらく静けさが続いた後、すっと戸が開きました。門内が、背を低くして覗き込むと、
「おお、門内か。久しぶりです。こちらにお移りくだされ。」
と、青白い顔をした白髪の老人が語りかけました。門内は、不慶に促されて、小舟に乗り移りました。
「門内、よくここまで辿り着きました。」
「レウコ様、いや、不慶様。お久しぶりにございます。」
「おお、本当に久しぶりです。もう、二十年にもなりましょうや。」

「不慶様、お元気そうで何よりでございます。」
「そう見えますか。わたしも、ずいぶん年をとってしまいました。平島にご挨拶に向かった頃は、まだまだ体も動き、京・大坂・紀州と吉利支丹の皆様方を励ましに歩き回ったものです。ときには、尾張や津軽までも足を伸ばしました。」
不慶は、うれしそうに相好を崩しました。
「そうでございましたか。津軽までー。」
と言うと、門内は黙り込んでしまいました。
「門内、どうかしましたか。急に黙り込んでしまって。」
「いえ、不慶様、わたしは平島足利家に仕える者でございます。不慶様のお言葉があまりにも、丁寧ですので恐縮しております。」
と言いうと門内は、すっと目をそらせました。
「そうでしたか。わたしは諸国を回り、神のお言葉を伝えることだけに生きてきました。そういう生き方をしてきましたから、このような語り口調に馴染んでしまったのでしょう。気になさらずに、お聞きください。」
「もったいのうございます。」
門内は、頭を垂れて恐縮しました。不慶は、その様子を曇りのない瞳で見つめていましたが、やがてゆっくりと門内に語りかけました。
「さて、門内。今日、ここに現れたということは、何か、平島に困ったことが起こったのですね。」
不慶のやさしく穏やかな声に触れ、門内はさらに頭を低くしました。
「不慶様、御慧眼恐れ入りましてございます。」
「門内、包み隠さずありのままをお話しください。」
「実は、阿波にもご公儀の穿鑿（せんさく）の手が及びましてございます。」（穿鑿ー究明し明らかにすること）
「そうでしたかー。祐賀様は、どうしておいでじゃ。お変わりはございませぬか。」
「はい。祐賀様はお達者にてございます。しかし、長崎奉行探索方の追及は執拗で、阿波足利家、徳島蜂須賀家にも疑いがかかってございます。この門内、不慶様にお願いがあって参りました。」
門内は、思いつめたような表情で不慶を見ました。
「門内、わかっています。今、わたしはご公儀がどうしても捕らえたい吉利支丹になっているのです。」
「不慶様、申し訳ございませぬ。わが荒川家は代々、足利家を守り抜くためにある家にてございます。足利義次様は、祐賀様の御潔白を訴え、切腹も覚悟であるとの書状をわたしに託してございます。何卒、皆様方のためにデウスの教えをお捨て下さい。」
「門内、有り難く思っています。妹、祐賀のこと、阿波足利家のこと、よろしくお願いいたします。わたしは、もはや高山右近様が昇天されたお年近くとなり、これまで十字架に架けられ、炎に灼かれてパライソに昇られたどの方よりも長く生きてしまいました。わたしは、平島の皆様やご恩のある蓬庵様、わたしのために力を貸してくださった人々まで類を及ぼすつもりはございませぬ。しかし、わたしは吉利支丹、自害することはかないませぬ。何よりもデウス様に背くことは決してできませぬ。そして、そなたに主筋殺しの汚名を着せることもできませぬ。」
澄み切った不慶の目は、優しく門内を見つめていました。
「不慶様、それでは、一体、どのように。家光公は、伴天連を追放するだけでなく、全ての民

を取り調べよと各藩に下知されました。これは、吉利支丹取り締まりを天下万民への仕置きとして行うことのお触れです。吉利支丹はもとより、宿主や力を貸すものすべてを芋づる式に捕らえて、棄教するまで責めぬき、根絶やしにしてしまおうとする過酷な策にございます。」
不慶は、追い詰められた不慶の様子を黙って見守っていましたが、やがて、ゆっくり口を開きました。
「門内、わたしはわたしの行くべきところに行き、なすべきことをなします。」
門内は、訳が分からず尋ねました。
「不慶様、一体どこへ。なすべきこととは。」
「門内、あなたもなすべきことをなすのです。」
「わたしのなすべきこととは。」
門内は、食い入るように不慶の顔を見つめました。不慶は、門内の両肩にそっと手を乗せると、静かにやさしく語りかけました。
「あなたの知っていることを伝えるのです。」
「知っていることを？」
門内は、さらに尋ねました。
「そうです。あなたは、探索方にわたしの居場所を話すのです。足利家の者がわたしを捕らえるために助力したとなると、阿波足利家に対する疑いは晴れましょう。蜂須賀家にも難儀がかからなくなります。」
「しかし、不慶様、それでは捕らえられた後に、穴吊りや水責め、火責めの責め苦が待っております。」
「そうです。かのフェレイラ神父様でさえ、穴吊りでお転びになりました。大変苦しくつらい責め苦です。しかし、わたしは今までポオロ様や都の方々の最期を見届けて参りました。中には、幼子を抱いたまま灼かれた母様もおられた。皆様、祈りの言葉を唱えながら天に昇って逝かれました。わたしは、陸奥、畿内、西国、南蛮と各地を巡り、いよいよ齢六十を超えました。実は、わたしの体もそう長くはないのです。門内、わたしの最後の巡礼は、これまで責め苦に苦しみ、神を見捨てざるをえなかった人々の辱めを雪ぎ、暗闇を抜け光り輝く神の國へ昇ることです。それをやりとげることで、デウス様を奉る人々の救いとなりたいと思います。それは、わたしの大切な人々を守ることにもなります。わたしの苦しみが大きければ大きいほど、デウス様、マリア様の大きな愛を知ることになるのです。」
「不慶様。それは、あまりにもー。」
門内は、もはや何も言えなくなって嗚咽を漏らしました。
「門内、足利家に連なる者が手助けし、その結果、わたしが捕らわれれば、探索方の足利家に対する疑いも晴れましょう。」
「不慶様、そのようなことは。」
「門内、言うとおりにするのです。わたしを信じるのです。わたしは、決してデウス様を裏切ったりはいたしませぬ。わたしは、この後、讃岐の引田に向かいます。讃岐に嫁いでいる祐賀の娘とめに話すのです。それが、祐賀と娘のとめを救う手立てです。次にお会いするところは、阿波と讃岐の国境大坂の峠といたしましょう。大坂の峠であれば、わたしに関わる人はおりませぬ。辛い役割となりますが、頼みましたよ。」
不慶は、突っ伏して顔を伏せている門内の手を握りしめました。
「不慶様。申し訳ございませぬ。来るべきではございませんでした。」
門内は、もうそれ以上何も言えなくなり、ただ涙を堪え、顔を上げることができませんでした。

平伏した門内に向かい、不慶は穏やかに笑顔で語りかけました。
「門内、わたしはありがたく思っています。デウス様のなすべきことは、すべてよきことです。わたしは、やっとすべての人を赦すことができそうです。」

門内は、不慶と分かれて加太の湊に戻りました。大坂奉行所から戻った長崎奉行探索方は、門内の手引きで岡籐左右衛門を見つけ出しました。与力らは、不慶の居所を厳しく問いただしました。籐左右衛門は、初めは答えませんでしたが、その内、不慶は沖の小島の船中に潜み、阿波へ行こうとしていると漏らしました。与力らが湊に出向くと、不慶は阿波へ船を出した後でした。与力らは、籐左右衛門に命じて不慶を追いかけて、阿波へと向かいました。

門内は、探索方と別れ、大坂奉行所に出向きました。そして、不慶捕縛のため阿波足利家が尽力したこと、讃岐の豊嶋家が助力したことなど、これまでの経緯を申し述べました。大坂奉行所に残っていた榊原飛騨守は、門内に向かって皮肉な笑みを浮かべて言いました。
「門内、その方は不慶を捕らえんがために、たいそう努力した。よって、褒美を遣わそう。」
仙石采女も、続いてうすら笑いをこらえながら言いました。
「主筋にあたる者の捕縛にも関わらず、ご公儀の下知に従い神妙である。武士の真の奉公とはこうあるべきである。」
門内は、顔を紅潮させて答えました。
「誠に恐悦にございます。しかしながら、褒美はご遠慮いたします。我が阿波足利家はご公儀に恭順してございます。わたしは阿波足利家のためのみにご奉公いたしたのでございます。」
門内は、それだけ申し述べると大坂奉行所を後にしました。

一か月後、讃岐引田浦に着いた門内は高松の豊嶋家に向かいました。豊嶋家では吉利支丹の疑いがかかり、主の五郎右衛門が藩主生駒家の手により、城下の牢で召し籠に入れられていました。
「とめ様。門内、ただ今、戻りましてございます。」
走り続けて息の乱れた門内は、一気に言いました。門内の目の前には、青白い顔をして幼子を抱きかかえたとめが立ちすくんでいました。
「門内殿、戻られたのですね。大変なことになりました。主の五郎右衛門が召し籠に捕らえられてしまいました。」
幼子を抱えたとめは、門内の足下に泣き崩れました。門内は、不慶との一部始終をとめに向かって話しました。
「とめ様、高松藩主生駒様に不慶が阿波と讃岐の国境に向かっていることをお伝えください。不慶様は、決して阿波国へは入られませぬ。大坂の峠で追っ手をお待ちでございます。」
「門内殿、なんということを。そのようなことはできませぬ。」
とめは、首を大きく横にふって目をつむりました。
「とめ様、不慶様を信じるのです。不慶様のお心を無駄にしてはなりませぬ。不慶様は、全ての者をお赦しになって、全ての方のために、デウス様を信じて我が身を捧げようとしておられるのです。不慶様のお志を叶える邪魔はしてはなりませぬ。不慶様は、阿波足利家を救い、愛する祐賀様やとめ様を救おうとされています。そして、これまでに非業の死を遂げた吉利支丹の皆様の辱めを雪ぎ、罪深い全ての方を赦して、デウス様の真の教えをこの世に広めようとされているのです。」
「門内殿。」

とめは、顔を上げることができなくなりました。門内は、泣き伏すとめを抱きかかえ、立ち上がらせました。とめは幼子を抱えたまま、泣きながら高松城内の生駒家屋敷へと力なく歩いていきました。

　とめから知らせを受けた生駒家捕り方と阿波に着いた門内は讃岐から大坂峠を登っていました。雪の積もった山道を手折りながら一列で登り、いよいよ峠に差し掛かろうとしたとき、正面から一人の初老の薬師姿の男が近づくのが見えました。門内の心臓は大きく早く打ち始めました。しかし、男は、全く気にするようなそぶりを見せず、門内らの横を通り過ぎようとしました。男が列の先頭に差し掛かろうとしたとき、捕り方の一人が男の前に立ちはだかりました。

「待たれよ。」

先頭の捕り方がその男の鼻先に六尺棒を差し出し、呼び止めました。

「そなたは、どこに参られる。」

もう一人の捕り方も男の後ろから棒を押し付けました。

「わたしは、阿波の吹田村に向かっておりまする。」

と、男は答えました。

捕り方の一人が、日除け笠に隠れている男の顔を覗き込み、尋ねました。

「そなたは、薬師か。背中の葛籠の中を見せられよ。」

「中は、薬にございます。」

「よいから、見せよ。」

そう言って、探索方は男の背中から葛籠を引きはがしました。葛籠の中には、確かに薬が入っていました。しかし、薬袋の一つに白い木片のようなものが入っていました。つまみ上げると指先にはさらさらとした白い粉がまとわりつきました。それは、焼かれたであろう骨の欠片でした。捕り方は、白い粉を指先で擦り合わせながら男の方を見て尋ねました。

「これは、なんじゃ。骨か。なんの骨じゃ。」

「それは、ポオロ様の骨でございます。」

「何、ポオロ様？ポオロとは、吉利支丹ポオロ三木のことか。そなた、不慶か。」

捕り方は慌てて男の笠をはぎ取りました。笠の下からは、白髪を後ろで一つにまとめた皺がれた老人の顔が現れました。捕り方を見る男の目は澄み切っていました。

「門内殿、いかがか。不慶であるか。」

捕り方の男は列の最後にいる門内に向かって叫ぶような声で問いました。

「いかにも、不慶でございます。」

門内は、観念したように答えました。

「不慶、おとなしく縛につけ。」

不慶は、俯せに押し倒され、なされるまま後ろ手に縛られました。その様子を見ていた門内は、悟られまいと涙をこらえ、叫びました。

「阿波足利家、蜂須賀家に仇なす伴天連不慶、覚悟せよ。」

　捕らえられた不慶は、讃岐生駒家で裁かれずに、生きたまま大坂奉行所へと送られることになりました。門内は囚われの不慶と別れ、重い足を引きずりながら阿波平島へと戻っていきました。その後、ご公儀から豊嶋家にはお構いなしの裁可が下され、五郎右衛門は解き放たれ、とめの元に戻されました。

五　穴吊り

一六三六年寛永十三年、大坂奉行久貝因幡守は、不慶を穴つるしの刑に処し、これまでの吉利支丹と同様に転ばせることにしました。不慶は大坂町奉行所の冷たい石畳の上にいました。浅葱色に染められた単衣の着物を着せられ、その上から縄をかけられて後ろ手に縛られたまま正座させられていました。

「不慶よ。そなたをかくまったのは誰かな。二十年もの間、だれがそなたに宿や金を与えてくれていたのじゃ。さあ、観念して話されよ。」

奉行は、柔らかな笑顔を作って不慶に近づき、片膝をついて語りかけました。

「わたしは、誰の世話にもなっておりませぬ。四国の山中で自ら食を手に入れておりました。」

と不慶は、はっきりとした声で答えました。

奉行は、鼻でふふんと笑うと、何ともやさしい声で不慶に話しかけました。

「そんなはずはなかろう。一人で生きていくなどできるわけがないであろう。」

不慶は、力のこもった目で奉行を見据えて言いました

「確かに、一人ではありませんでした。わたしは、常にデウス様とともにありました。」

すると、奉行はゆっくりと立ち上がり、一つ息を吐いて不慶を見下ろして言いました。

「デウスとやらは、そなたら吉利支丹を助けてはくれぬではないか。役に立たぬ教えなど捨て去ってしまえばよかろう。そうすれば、穴吊りにはせぬぞ。そなたも、この穴吊りのことは聞き及んでおろう。」

不慶は、身動きせずに答えました。

「デウス様のお教えは、役に立つかどうかなどというものではございませぬ。デウス様やその教えは、わたしたち吉利支丹の救いでございます。デウス様にできぬことなどございません。」

「それでは、デウスとやらはそなたら吉利支丹が塗炭の苦しみにあるときに、なぜ助けてはくれぬのじゃ。そなたらの唱える救いとはいったい、どんなことを申しておるのじゃ。」

「デウス様は、もう十分にわたしたちをお救いくださっています。デウス様は、そのお命で私たちの罪をも贖われたのです。」

そう言うと、不慶は目を瞑って歌い始めました。

「まいろうや、まいろうぞ、パライソにまいろうぞ。」

「そうか、それでは仕方ないのう。穴に入って考え直してもらうしかあるまい。穴吊りの苦しみを十分に味わい、デウスとやらが救えるかどうか試してみよ。」

奉行があごで合図を送ると、役人は不慶の頭から籠を被せ、奉行所から連れ出しました。

一里ほど南にある刑場に着くと、役人の手で不慶の頭に布袋が被されました。そして、吊り下げたとき内臓が下がらないようにきつく体を縛られました。役人が縄を引くと、不慶の体は足から持ち上がり、逆さまに吊るし上げられました。役人が掴んでいた縄を緩めていくと、不慶の頭は、小さな穴の中にすっぽりと入っていきました。不慶のこめかみには、頭に血がたまらないよう血抜きのための穴が空けられていました。その穴からは、頭に下がった血が流れだし、被らされた袋の先に溜まった血は、布に沁み込んでから、ぽたぽたと穴の底に落ちていきました。頭の中に流れる血の音がどくどくと耳に聞こえ、鼻から流れ出す血のために息を吸うことができず、動けば動くほどきりきりと体に食い込む縄の痛さが不慶を苦しめました。逆さまに吊され、頭痛と息苦しさの中でしたが、不慶は身を捩りながら、まだ力のある声で言いました。

「御主くるすを負わされ　御主いばらの冠　かぶらせたまい　御主われらのために　」

その声を聞き留めた奉行は大きな声で叫びました。

「ええい、まだまだじゃ。もっと、音を大きくせよ。不慶の声をかき消してしまえ。」
穴吊りの横では、鉦や太鼓が激しく打ち鳴らされ、不慶を苦しめました。それは、穴吊りを行う人々の恐怖を打ち消したいが故の音でもありました。
　二時がたち、逆さまに吊るされた不慶は苦しみ続けていました。もう、だめかと身をよじってあがくとき、目に浮かぶのは、幼子を抱えた母親の姿でした。そして、耳に聞こえるのは、全ての人々を赦すと叫ぶポオロ三木の声でした。奉行は、転ぶそぶりを全く見せない不慶に問いかけました。
「不慶よ。そなたにも仲間がおろう。」
「お、おりませぬ。」
「そうかな。そなたの横に、ミカエル草庵という者が来ておるぞ。」
不慶は、はっと目を開きました。
「草庵、なぜ。」
不慶は、門内と最期に出会った日から、草庵の隙を突いて置き去りにし、一人で行動していたのでした。それは、草庵を助けるためでした。不慶は、穴の中から草庵に話しかけました。
「草庵、なぜだ。なぜ、ここに。」
吊るされた不慶のすぐ横に縛られて転がされた草庵は、息苦しさと押しつぶされそうな苦しみの中で言いました。
「不慶様、お近くに来られて、わたしは本当に幸せでございます。」
「草庵、すまない。本当にすまない。」
不慶のこめかみから流れ出た赤く熱い血に、清らかな涙が混じって落ちました。
この様子を察した奉行は、不慶を穴から出すことにしました。
「このまま、死なせてしまったのでは勿体ない。不慶はともかく、草庵と申す男は卑しい男だ。吉利支丹とはいえども、ろくさま祈りの言葉さえ覚えられないつまらない小者だ。こいつを厳しく責め立てれば、すぐさまに転ぶであろう。この者を使って不慶を転ばせるのじゃ。」
奉行は、侮蔑の笑いを浮かべながら、横に控える役人に小声で話しました。
「それはよい手にございます。不慶に常に寄り添っていた草庵が息も絶え絶えに苦しんで死んでいけば、いかに不慶とて心が折れることでしょう。まずは、草庵にねらいをつけましょう。」
役人は、さも心得たように答えました。

　横にされて身動きもとれない草案に向かって、奉行は優しく語りかけました。
「確かフェレイラとか申す伴天連も、今は吉利支丹をやめて沢野忠庵と名乗り、幸せに暮らしておるそうな。そなたらも、強情を張らず、今だけでも一旦、吉利支丹をやめてみてはどうかな。草庵殿、そなたの大切な不慶様をお救いできるのは、今はそなただけですぞ。悪いようにはせぬから、不慶様に、転びましょうと言ってはくれんか。」
草庵は、答えることもできずに、ただ黙ってうなずきました。二時ぶりに引き出された不慶は、頭に被された布袋を外され、よく見えなくなってしまった目ですぐ側に横たわる草庵を見つめていました。
「草庵、そこか。なぜ、逃げなかったのだ。なぜ、ここに。」
縛られたまま横たわる草庵は、かすれた声で不慶に語りかけました。
「不慶様。わたしは幼き頃より、愚かで読み書きもできず、馬鹿にされ育って参りました。大人になっても、くらしは貧しく、腹一杯飯を食ったこともございませんでした。人々は、そんなわたしを虫けらのように扱いました。しかし、不慶様や吉利支丹の皆様は、わたしを一人の

人として扱ってくださいました。救いの手を差し伸べてくださいました。わたしは、生まれてこなければよかったとずっと思って生きて参りました。けれども、不慶様に出会って、デウス様の教えを聞き、初めて人に生まれてよかったと思えたのです。それは、まるで暗闇の中に灯された暖かく明るい炎の光のようでありました。」
「草庵。そなたは常にわたしに寄り添い、わたしを助けてきてくれました。感謝しています。デウス様のなすことは全て善きことです。」
横たえられた不慶は、ぐっとあごを閉めました。
「不慶様、もったいないことでございます。わたしは、永遠に不慶様とともにデウス様とともにあります。」
草庵は、土埃と汗で薄汚れた顔を不慶に向けて一礼しました。ここまで、聞いていた役人は、はっと我に返り、二人を足で蹴り、苦々しい顔をして叫びました。
「草庵を、先に穴に吊せ。草庵は、つまらぬ小者じゃ。すぐに転ぶと言い出すであろう。しかし、不慶が転ぶまでは死んでも二度と上げてはならぬ。」
草庵は穴吊りにされ、暗闇の中へと落とされました。それでも、草庵は、暗い穴の中で不慶に話しかけ続けました。
「不慶様、聞こえますか。不慶様。まいろうや、まいろうや、パライソの寺にまいろうや。パライソの寺と申するが、デウスの寺とは申するが。不慶様、わたしの祈りの声が届いておりましょうや。不慶様。レウコ様。」
草庵は、途切れる意識の中で、それでも祈りの声を唱え続けました。しかし、その声は、段々と小さくなり、やがて荒い息遣いへと変わり、遂には獣の唸り声のような音が途切れ途切れに聞こえるだけになりました。
「不慶よ。草庵を哀れとは思わぬのか。こやつは、そなたを追って、わざわざここに来たのじゃ。そなたのことをこれほどまでに慕う者が、ここまで苦しんでおるのじゃ。草庵の息が止まりそうではないか。そなたにも聞こえておろう。この哀れな草庵は、そなたのためにこれほど苦しみ、死んでいこうとしておるのだぞ。それでよいのか。そなたが転べば、すぐにでも草庵を助けてやってもよいのだぞ。」
奉行は、横たわる不慶に向かって、説き伏せる様に話しかけました。
「草庵、すまない。本当にすまない。神よ、すべての者をお赦しください。この者たちは何をしているのか分からないのです。」
不慶は、ただただ涙を流し続けました。その姿を見ていた奉行は次の手を打つことにしました。
「不慶も、一緒に穴吊りにせよ。」
奉行の命が下ると、再び不慶は役人の手によって逆さ吊りにされ、穴の中へ入れられました。
　次の日、体を痛めつけられていた草庵は遂に息絶え、その儚く惨めな一生を輝かしい光の中で終えることができました。草庵の目からは、涙が流れ出していました。奉行は静かになった草庵の穴の横に立ち、不慶に話しかけました。
「不慶よ。草庵はついに転びおったぞ。やはり、草庵はそなたの教えやデウスを信じ切れなんだようだ。次は、そなたの番ではないのか。転んだとて、それはそなただけではないぞ。デウスとやらは、そなたらを助けには来ぬではないか。この世のまことのものにこそ、信ずるべきものがあるのではないか。どうじゃ。悪いようにはせぬぞ。」
不慶は、黙ってその声を聞いていました。体に食い込む縄の痛さに苛まれながら、息苦しさの中で祈りの言葉を繰り返しました。
「御主くるすを負わされ　御主いばらの冠　かぶらせたまい　御主われらのために　」

「御主　　くるすを負わされ　　御主　いばらの冠　　かぶらせたまい　　御主―　」

三日目の寒い朝を迎えた頃、不慶は声も出せず、息を吸うこともできず、意識があるのかないのかさえ、分からなくなっていました。しかし、あれほどうるさかった鉦の音が、なぜか急に小さくなり始めました。先ほどまで聞こえていた音が全く無くなり、足元から差し込んでいたはずのわずかな光も消えていきました。そして、ろうそくの炎が消える様にふっと真っ暗になり、時が止まり、音のない暗闇が広がりました。不思議なことに、あれほどの痛みも苦しさも嘘のように何も感じなくなっています。不慶は逆さまになっているはずでしたが、上も下もなく体が軽くなり、自分の体の存在さえも分からなくなっていました。なぜか、ふわりと地上に出ているようでした。暗闇に包まれた周りには何もない世界が広がっていました。しばらく漂っていると、暗闇の中のはるか遠くに小さな光が見えてきました。その光はだんだん近づいてくるようでした。白い光は強く大きくなり、あるはずのない全身を包み込みました。

「レウコよ。よく参られました。」

耳には、美しいオルガンの音と、懐かしいポオロの声が聞こえてきました。

「ポオロ様、ここにおいでたのですね。おなつかしく。やっとお会いできました。」

「レウコ、よくがんばりました。さあ、パライソにともに参りましょう。」

周りには、いつしかたくさんの懐かしい顔がうれしそうに集まっていました。その中には、かつてロザリオやメダイを与えた子どもや母親の笑顔もありました。

二月二十六日、穴吊りにされてから三日目、不慶は神の國に昇りました。苦しみ抜いて死んでいったはずの不慶の口元は緩み、微かな笑みが浮かんでいました。

六　大法師不慶の石碑

不慶の体は、切り刻まれ、近くに流れている木津川の河原で焼かれ白い灰とされました。吉利支丹の体はたとえ、一欠片でも神州日の本には残してはならぬとの厳しい掟が下っていました。不慶の灰は袋に詰められ、海に捨てられることになっていました。

不慶が穴吊りにされてから、天に召されるまでの一部始終を見届けていた者がいました。それは、長崎奉行配下の九郎兵衛でした。九郎兵衛は、不慶とともに灼かれて潰れたクルスを人目を盗んで拾い上げると、ひとつかみの灰とともに小さなきれいな袋にさらさらと詰めました。

九郎兵衛は長崎奉行榊原飛騨守に報告をするために九州へと向かうはずでしたが、途中阿波平島へと向かいました。それは、不慶の灰を身内の者に届けるためでした。九郎兵衛もこめかみに傷跡を持つ転び吉利支丹でした。幼き頃に身内の裏切りに遭い、家族を処刑されていました。その後、穴吊りにされて、教えを捨てて転び、吉利支丹取り締まり方に身を落としていたのでした。しかし、不慶の最後の姿に接し、心の中で何かが変わったようでした。

平島に着いた九郎兵衛は、阿波足利家の屋形の前まで来ました。

「お頼み申す。ここに不慶様のお知り合いの方はございませぬか。」

「こんな夜分にどなたでござるか。」

屋形の中で宿直の番に着いていた門内が木戸から覗きました。

「おや、あなたさまは、どこかで。」

門内も、不思議そうに男の顔を見ました。その男のこめかみには見覚えのある傷の跡がありました。門内は、大坂峠でこの男と一緒に煙草を吸ったことを思い出しました。

「おお、大坂の峠でご一緒した方にございますな。」

「そうでございます。覚えていてくださりましたか。」
九郎兵衛は、静かに低い声で答えました。
「一体、何用があって平島に。」
門内は，不思議そうに尋ねました。
「わたしは、ご当家ゆかりの方の最後を見届けた者にございます。」
「当家ゆかりと。」
「はい。不慶と名乗る伴天連のことにございます。」
「不慶、と申されましたか。不慶様は確かに足利家所縁の方でございます。まずは、お入りください。」
門内は、床についていた祐賀に事の次第を告げ、九郎兵衛を客間に通しました。
しばらくすると、急ぎ足の祐賀が音を立てずに入ってきました。九郎兵衛は、平伏して迎えました。祐賀は、上座に着くと、挨拶もせず、いきなり九郎兵衛に尋ねました。
「九郎兵衛殿ですか。兄の不慶は一体どうなったのですか。」
「あなた様が不慶の妹君にございまするか。お目にかかれようございました。これを。」
九郎兵衛はきれいな布袋を懐から取り出して、祐賀に丁寧に差し出しました。
「それは？何でございますか。」
不思議そうに祐賀が尋ねました。
「この袋の中身は、不慶様の遺灰にございます。」
九郎兵衛は両手で袋を捧げ、深く頭を下げました。
「不慶様の……。」
祐賀は言葉を発することができず、口元を両手で押さえました。
顔を抑え、声を殺して泣く祐賀に、九郎兵衛は、不慶の最期の様子を話し始めました。
「不慶様は、穴吊りにされ、苦しみながら三日後に息絶えました。それは、この世の地獄を味わっておられるような苦しみようでございました。しかし、どんなに苦しくとも、決して祈りの言葉を止めませんでした。役人たちは、厳しく締め付けたり、時には優しい言葉をもって騙そうとしましたが、不慶様はデウス様のお教え通りに生き抜かれました。それは、真の吉利支丹の姿にございました。」
ここまで話すと九郎兵衛は、急に言葉に詰まりました。しかし、またぽつりぽつりと語り始めました。
「実は、わたしの一族も天草に住む吉利支丹でした。しかし、取締りが厳しくなり親戚の者が、次々と穴吊りにされて転び吉利支丹となっていきました。わたしも、縁者の白状から捕えられ穴吊りにされたのでございます。このこめかみの傷跡は、そのときにつけられた血抜きの跡です。わたしは、あまりの苦しさに耐え切れず、一時ももたずに教えを捨てると言ってしまいました。そして、ついには、デウス様の教えを授けていただいた方の居所までも白状してしまったのです。その後は、長崎奉行所の役人たちに使われ、吉利支丹を取り締まる役目につき、恥ずかしながら生き延びてしまったのです。」
九郎兵衛の目からは、大きな涙の粒が次から次へと流れ出てきました。その様子を見ていた祐賀は、涙声で語りかけました。
「九郎兵衛様、大変お辛かったことでしょう。穴吊りの苦しみと、大切な人々に裏切られた悲しみ、どちらも耐えがたきものであったとお察し申し上げます。」
「不慶様はお供の草庵殿と励まし合い続け、大切な方々のお名前は誰一人も漏らすことはありませんでした。さらに、最期にはデウス様のなすことは、全てよきことだと仰いました。不慶

様は、大切な方々も、デウス様も、そしてご自身も、すべての方を裏切ることなく、パライソに昇って行かれました。わたしは、デウス様の教えを捨ててしまった者ですが、不慶様のことを深く心に刻んで生きていきたいと思います。できることならば、わたしも、もっと早く不慶様に出会いとうございました。わたしの目には、お供の草庵殿はとても眩しく輝いて見えました。」

「兄上。」

祐賀は、九郎兵衛から袋を譲り受け、胸に抱きかかえて涙を流しました。

「九郎兵衛殿、かたじけない。ありがとうございました。」

二人を見守る門内もまた涙を流していました。九郎兵衛は、不慶が微笑みながら三日目に亡くなったこと、その後遺体は土に還ることを許されず、火で焼かれて灰とされたことなどを、見たまま祐賀と門内に話し伝えました。

朝を迎え、九郎兵衛は門内と祐賀に見送られながら平島を後にしました。九郎兵衛は、長崎に戻り、不慶仕置きの顛末を長崎奉所で報告しました。

「伴天連不慶、穴吊りにされて三日目にて死を迎えました。奉行所の取り調べに際し、阿波と讃岐の山中に棲み、だれの助けも受けずと答えました。その毅然とした態度に大阪奉行久貝殿もそれをお認めになりました。」

一六三七年寛永十四年、不慶が天に召されてから一年後、島原天草で約三万人の百姓身分の者たちが武器をもって蜂起しました。島原・天草の乱と呼ばれたこの戦いでは、幕府軍の将兵にも多大な死傷者がでました。この後、幕府は吉利支丹取締りをさらに厳しくしていきました。そして、再び祐賀に吉利支丹の疑いがかけられました。しかし、不慶が所縁の者について何も漏らさなかったこと、荒井門内が祐賀に付き添い、命懸けで嫌疑を晴らしたことから、阿波足利家ゆかりの者には一人として犠牲者は出ませんでした。それでも、不慶の壮絶な死がもたらした哀しみと恐れは、足利家の人々の心を少しずつ蝕んでいきました。足利一門である祐賀の兄不慶を穴吊りへと追いやる役割となった門内と、加太港の船上での二人のやり取りを何も知らされていない若き足利義次との関係は、日増しに悪くなっていきました。阿波足利家を守るために荒川の家名と命をかけた門内でしたが、それは蜂須賀家を守ったことでもあり、その功績は徳島藩家老賀嶋主水正や長谷川越前にも認められていました。祐賀が病に倒れると、蜂須賀家との関係を疑われた門内は、遂に義次から切腹を命ぜられ、謹慎となっていました。閉門蟄居中の門内の元に、徳島藩からの呼び出し状が届きました。

「門内、そなたを日開谷口番所へ置くこととする。」

徳島城御殿に呼び出された門内を前にして、賀嶋主水正が上意を読み上げました。

「ははっ。謹んで承りまする。」

失意の中にあった門内は平伏しました。

「門内、切腹はならんぞ。そなたは、平島の恩人であるだけでなく、わが蜂須賀家にとっても藩祖蓬庵様にとっても恩人である。讃岐生駒家は吉利支丹と御家中の仕置きに躓き、改易の憂き目に遭った。蜂須賀家は、ご公儀からの吉利支丹取締に神妙に従い、嫌疑を晴らすことができた。それは、そなたの働きがあってのことである。」

「もったいなきお言葉にございます。しかし、主水正様、それらは全て不慶様お一人が、命を懸けてなし遂げられたことにございます。」

「門内、分かっておる。しかし、それは決して口外してはならぬ。不慶はあくまでも、伴天連不慶として捕えられ、デウス様の教えを貫いて仕置きされたのじゃ。そこを動かしてはならぬ。

それは不慶の遺志でもある。」
主水正は俯いて目を固く閉じました。
「ははっ。分かっております。分かっておりますが……。」
言葉を失くした門内は、奥歯を噛み締め、溢れてくる涙を堪えて顔を伏せました。

日開谷は、阿波徳島と讃岐高松を結ぶ最短の道筋にある大坂峠からは随分西に離れていました。それは、不慶の捕らえられたところから離れているだけでなく、不慶の行き来を助けた人々が住んでいるところでもありました。不慶は、自分を助けてくれた人々の全てを守ろうとして、大坂峠を捕縛の場所に選んだのでした。日開谷に着いた荒川門内は、受け入れてくれた地元の組頭井内家の井を頂き、荒井と名乗ることにしました。それは、足利家の家臣であることを忘れないことと、これまでの家名を変えて日開谷の人々とともに生きる決意の表れでもありました。日開谷について五年後、荒井門内が守り通した平島の祐賀から、きれいな布袋の包みが届きました。包みには文が添えられていました。
「門内殿、これまでわたしと足利家のためによく尽くしてくれました。ありがたきことと心より感謝しています。わたしはもうすぐ、兄不慶の側に参ります。この書状が門内に渡る頃には、わたしは、もうこの世にいないことでしょう。わたしが大切に祀っていた不慶様の遺灰をあなたに託します。これを、義次に受け渡すことはできません。代々の足利公方が祀られる西光寺に入れることもできませぬ。しかし、不慶様が命をかけて守ってくださったからこそ、わが足利家と一族の者が守られました。吉利支丹は、亡くなった後はみな神の國へと祝福されて昇ります。わたしからの最後のお願いです。再び足利家に嫌疑がかからぬよう、このロザリオと遺灰を誰にも分からぬよう隠し、安らかに眠らせてあげてください。そして永遠にわが足利家をお守りください。」

一六五七年明暦三年、荒井門内は受け入れてくれた日開谷の人々のために庚申塔を建てることを思いつきました。その石碑に文言を刻むために、備前から腕の良い石工を呼びました。そして、石碑を作っている間に、なぜか、もう一基別の石碑を作るように頼みました。門内は、日開谷の河原から一抱え程の砂岩を犬墓大師堂に持って帰ってきていました。その石の表面を削って作った平たい表面に一文字一文字何かを呟きながら墨書きしました。書き終わった門内は、大師堂の中で石工に頼みました。
「この石碑には、『大法師不慶　寛永十二年九月廿九日』と刻んで欲しいのだ。」
石工は、訳が分からず門内に尋ねました。
「ずいぶんと昔の日付でございますなあ。今から二十年よりもっと前ですが、その日はその方が亡くなった日でございますか。」
石工は門内に背を向けたまま、一抱えもあるそのざらざらとした石に模りの鑿を入れ始めました。
「いや、そうではない。しかし、その日は、わたしやわたしに関わる人々にとって、決して忘れてはならない覚悟を決めた日なのだ。」
門内は、北の城王山に目をやりながら自分に言い聞かせるように話しました。
「ほう、そうでございましたか。よく分かりませんが、大法師不慶とは、また変わったお名前で。偉いお坊さんでございますか。」
石工はカンカンと音を立てて、刻み続けました。
「そうではないが、不慶と申すお方は、自らの命を捧げ人々を救った徳のあるお方であった。

この方のお陰でー。」
ここまで話すと言葉に詰まり、目からは涙が溢れ、何も言えなくなってしまいました。
「おや、どうかなさいましたか。」
石工は振り返って鑿の手を止め、真顔になって尋ねました。
「いや、何でもないのだ。何もなかったのだ。何も。」
門内は、石工に背を向けて自分に言い聞かすように告げました。

二月十六日日開谷に、白い花びらのような雪がひらひらと舞う冬の寒い朝、門内は日開谷口番所の近くの見晴らしの良いところに立っていました。この日は穴吊りにされた不慶が神の國に昇った日でした。門内は手にした美しい布袋から白いさらさらとした遺灰を取り出すと、掘った穴の中に丁寧に撒き広げ、その上に土をかぶせて石碑を建てました。そして、「大法師不慶　寛永十二年九月二十九日」と刻まれた石碑に向かって跪き、かじかんだ指先を固く組み合わせました。石碑に刻んだ九月二十九日は、門内と不慶が二人で話を交わし、足利家や吉利支丹に関わる全ての人の命を救うことと決めた日でした。日開谷の川筋に沿って流れる冷たく乾いた北風は、門内の涙を乾かし始めていました。門内は平島がある南の方に向かい、眼下に流れる吉野川を見下ろしながら静かに目を閉じました。

荒井門内は、この小さな石碑に欠かさずお参りをしました。そして、門内自身が亡くなったときは、この石碑の横に自らの墓を作るように言い残しました。大法師不慶の石碑は、それから四百年が経ち平成から令和に替わる今もなお、荒井家の墓所内に大切に祀られています。

あとがき

筆者が地域の歴史に触れる中で感じたことは、この地域に住む人々は古より心優しく穏やかで、決して奢らず、純朴であるということだった。このことは、江戸時代の文書にも残されている。そんな中、日開谷口番所や荒井家、荒井門内が建てた県内最古の庚申塔、不慶の石碑の存在に接した。それは、これまでの仕事で出かけた、足利公方館跡や西光寺、蓬庵隠居所、大坂峠、讃岐大内、奥野観音院、南河内、讃岐、有岡などの場所がつながる出来事だった。荒井家の墓所で今もなお守られている石碑に触れ、「大法師不慶」と堂々と刻まれた文字を見たとき、決して疚しさなどから造られたものではなく、不慶に対する心からの尊敬と感謝が刻まれたものだと感じた。今は原位置を動かされている石碑だが、門内、もしくは子孫が造った当時の石碑の下に何もなかったとは考えにくく、何か大切なしるしがあったはずである。今となっては時の流れの中に埋もれてしまったことも多くあるが、石碑や文書の存在は、吉利支丹取締の厳しい時代に命をかけて生き抜いた人々の清らかで、烈しい純粋な生き様を伝えてくれていると思う。今も昔も人の心は変わらずあるのだと、一つの小さな石碑が語りかけている。